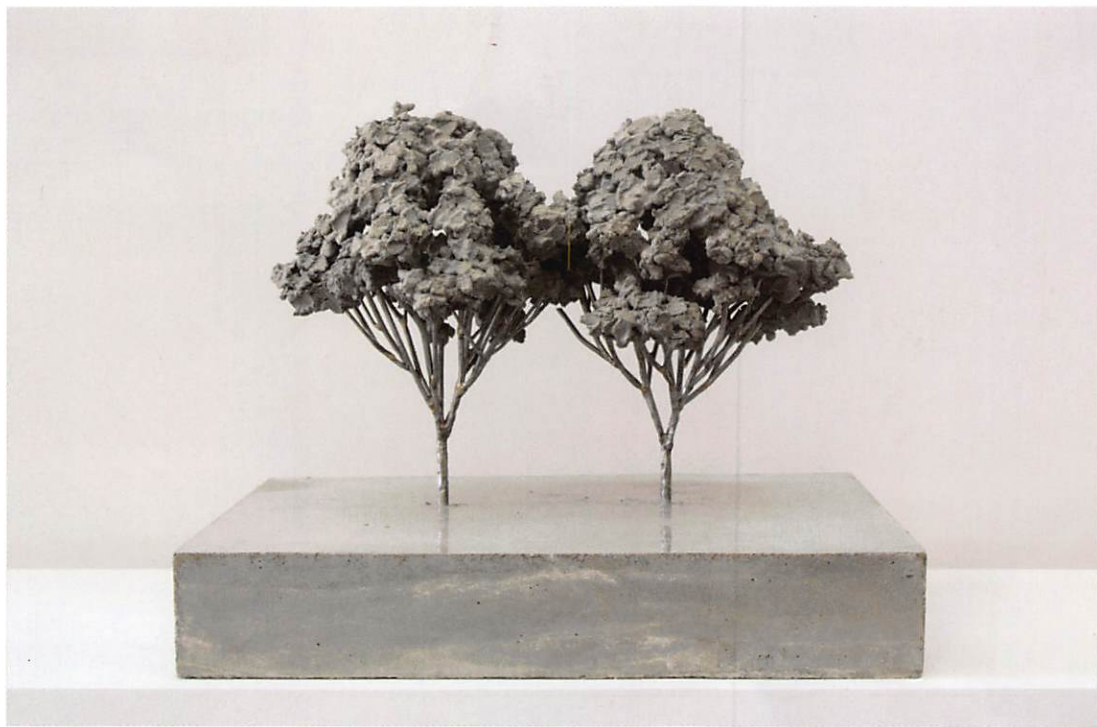


EXHIBITION

2017.3.1 (WED.) - 30 (THU.)
ITAMURO ONSEN DAIKOKUYA SALON

第12回 大黒屋現代アート公募展

会期 二〇一七年三月一日～三十日 会場 板室温泉大黒屋



大賞

八木 史記

- 宮城 -

「respiration」

28×36×36cm

型取りされたモルタルのその表面には、粒子の粗さや水の配合具合などに起因する小さな気泡が作られ、無機質中にも、呼吸のイメージすら彷彿とさせる質感を生み出す。一方で、水と混合し、練られたばかりのドロドロの状態に放置しておくドロドロの形状のまま硬化し、実際の硬さとは対照的に、どこか有機的な雰囲気さえ感じさせる。モルタルは人工的で無機質な素材であるが、時間の経過や扱いの違いで多彩な変化を作り出すことができる魅力的な素材である。そして金属と同じく人工的に無機質な素材と組み合わせ用い、素材としての可能性を追求するとともに、自然や大地の形を象ること、新たな空間、新たな空気をつくりだしたい。

菅 木志雄 アーティスト

<風景の思い>

モチーフになっている樹木は、元々自然の中にあるものである。自然はいまでもなく人が日々目に見ているので、意識の中に特別な思いでもなければ、あらたな視線を向けることは、少ない。が自然には、人の意識を喚起するさまざまな要素がある。光にしても風や水の流れや木々のざわめきや木の葉の散りくあいなど無限とっていいほどである。そのような自然の(動き)の中で、人は生きていて、そのことを実感しているといっても過言ではない。人は自然が瞬たりともとどまらず、動いていることは承知しているにもかかわらず、そのことに特別な思いを抱くことは少ない。自然の法則性に逆わず人の意識はたもたれている。ところで、この作品は、モチーフが樹木であり、かつそれがまるでケーキでもカットしたかのように(切り取られ)ている。そして、それお造形としてモルタルでつくられている。この作品がなんであるか知れるのは、視覚的な要素のみである。見れば、何をあらわしたのか、わかる。樹木なのである。どこにある、どのような種類の樹木なのか、それはつくった人でなければわからない。この樹木が、どのような場所にあつてどのように光をあび、風にゆれているのか、想像すべくもないが、逆の意味で自然の法則性を無視しなり立たせることが、ものの実体性をより強調に指示することもあつたといえる。また自然の無限性に思いを向けることも反作用としてあつたのであつた。

小山 登美夫 小山登美夫ギャラリー代表

今回の大黒屋の公募展にはバラエティに富んだ優秀な作品が多かつたと思います。立体、平面を問わず、既成の考えにとらわれない独自のアプローチで作られた作品を面白く拝見しました。八木史記さんの作品は、モルタルという人工物のもつ特性に魅力を持ち、そこに自然とのつながりを見て、自然の風景である地面から生えている樹木の姿をつくります。でも、自然を模しているわけではなく、この場でできてる新しい風景や空間を体感できる素晴らしい作品だと思つた。

天野 太郎 横浜市民ギャラリーあざみ野 主席学芸員

大黒屋の公募展も12年目を迎え、知名度の高さに伴って応募作品の質も年々上がつていくように実感します。今回の入選作は、比較的立体作品が多い印象があり、大賞を取つた八木史記さんの作品も風景を抽象化した立体作品で、展示の方法など今後工夫の余地があるものの、作品への評価が高いものでした。全体として素材のメディウムを絞り込んだ手業による作品が多かつたのも印象的でした。

室井 俊二 板室温泉大黒屋 代表

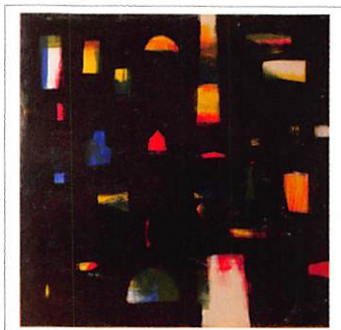
大黒屋公募展に入賞された皆さんおめでとうござつます。大賞の八木史記さんは大黒屋の空間にどのような風を吹き込んでくれるのか、来年10月の個展を楽しみに期待しています。



板室温泉 大黒屋
Itamuro Onsen Daikokuya

第12回 大黒屋現代アート公募展
入選作品

〒325-0111 栃木県那須塩原市板室856番地 お問い合わせ/坂口・八木
TEL 0287-69-0226 FAX 0287-69-0497
koboten@itamuro-daikokuya.com
www.itamuro-daikokuya.com



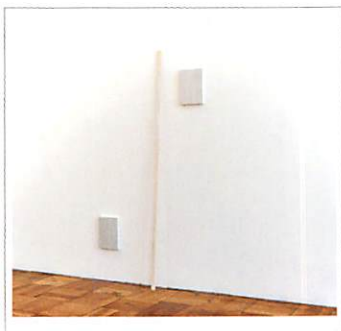
一戸 二鹿 - 東京 -
「脳内落下傘」91×91cm



大村 洋二郎 - 広島 -
「KAMISAMA MADE」115×90×90cm



沖見 かれん - 京都 -
「tower」72.7×60.6



長田 奈緒 - 神奈川 -
「lace curtain (forest)」90×90×180cm



織田 真二 - 愛知 -
「untitled」φ90cm



坂本 匡之 - 埼玉 -
「2016 境」32×28.5cm 4枚組



杉浦 藍 - 東京 -
「Cloud」55×90×40cm



鈴木 さと美 - 静岡 -
「up the circle」100×80.3cm



田口 悠菜 - 千葉 -
「そこにある かえってくるもの」100×100cm



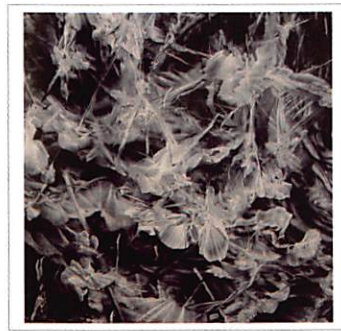
谷川 美音 - 京都 -
「リフレインの向こう側」10×95×0.5cm



八田 綾子 - 東京 -
記憶の浜辺「満月の入り口」40×43×33cm



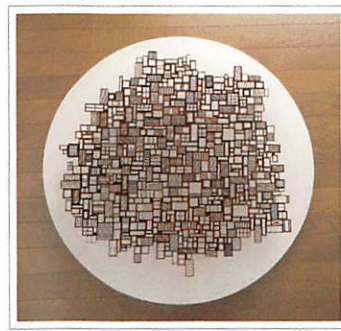
福島 寧子 - 埼玉 -
「かけら 18464/20F」72.8×60.7cm



藤森 哲 - 埼玉 -
「EPIDERMIS」100×100cm



宝珠戸 祥穂 - 東京 -
「恐怖と麗らか」80.3×100cm



松田 隆志 - 神奈川 -
「建具の空 no.001」118.5×80×80cm



森 洋樹 - 東京 -
「風景」50×60×35cm



森 裕子 - 東京 -
「Hilltop」48×26×13cm



安井 ちさと - 茨城 -
「自覚によって存在を得る i」47×78×48cm